第１８２回 長崎大学ＦＤ実施報告書（平成 31年3月 28 日提出）

１．題　目：ダイバーシティの観点から障害を考える　～大学の進むべき道～

２．日　時：　平成 31 年 1 月 31 日（木）　17：30 ～19：40

３．場　所：長崎大学グローバル教育・学生支援棟 4 階　文教スカイホール

４．主　催：長崎大学 障がい学生支援室

５．対　象：学内教職員及び学外者

６．長崎大学ＦＤに関する指針第二項への該当について【複数選択可】
（該当するものに○を記入すること）
［　○　］(1)　教員の教育活動に関するもの
［　　］(2)　カリキュラムの改善に関するもの
［　　］(3)　教育の組織的改善に関するもの
［　　］(4)　入学者選抜方法の改善に関するもの
［　　］(5)　その他教育改善及び入学者選抜方法の改善に関するもの

７．今回のＦＤの趣旨・意義（６．に関連した形で記述すること）

平成 28 年 4 月に「障害者差別解消法」が施行され、国公立大学では障害のある学生に対して合理的配慮の提供が義務となったが、米国の教育現場では 40 年以上前から合理的配慮の考え方が存在し、関連対応が成熟している。

一方、日本では法律や支援体制の整備が始まったばかりで、発展させることが急務である。今回の FD では米国の歩んできた道を振り返りながら、今後日本の目指すべきところについて外観したうえで、大学における合理的配慮の考え方や実践について伝授する。加えて、合理的配慮を受ける学生が増えても、配慮の調整や実施が過重な負担にならないよう、「学びのユニバーサルデザイン（UDL)」の導入についても教示する。

これにより、大学の限られた人的・物的資源を有効に活用することにも繋がり、多様化する全ての学生に質の高い教育を確保することに寄与するところに意義がある。

８．プログラム構成［題目・担当講師］（当日使用した資料等を添付すること）

1.　開会の挨拶　　17:30－17:35
　　塚元　和弘（障がい学生支援室 室長）

2.　講演Ⅰ　17:40－17:55

「中等教育における障害のある生徒のための移行計画」※録画による

Patricia Morrissey（ハワイ大学マノア校 障害学研究センター長）

3.　講演Ⅱ　17:55－18:55

「米国の高等教育における障がい学生支援　～全ての学習者のために～」

Robert Stodden（ハワイ大学マノア校 障害学研究センター 初代センター長）

4.　休憩　18:55－19:05

5.　パネルディスカッション及び質疑応答　19:05－19:35

6.　閉会の挨拶　19:35－19:40

調　　漸（障がい学生支援室 副室長）

９．参加者：　92 名（学内教職員 47 名・学生 11 名・学外 34 名）

（内訳）

所　　属	人　　数
多文化社会学部	2
教育学部	4
医学部保健学科	4
工学部	1
経済学部	1
医歯薬学総合研究科	2
熱帯医学研究所	1
熱帯医学・グローバルヘルス研究科	1
工学研究科	1
大学教育イノベーションセンター	1
長崎大学病院	1
ダイバーシティ推進センター	4
保健・医療推進センター	10
学生支援部	8
障がい学生支援室	6
学生	11
学外者	34
計	92

※　別紙に参加者名簿を添付してください。

１０．実施したＦＤの成果等

（１） 参加者からの評価（アンケートの集計結果を記述する）

	長大教職員	外部	計
参加者数 回収数（回収率）	47 33（70%）	45 18（40%）	92 51（55%）
教育職員	13		
事務職員	7		
技術職員	4		
学生	8	2	
教育・保育関係		7	
福祉関係		1	
医療関係		1	
就労関係		0	
その他	1	7	

2.年代

	人数	%
20 歳未満	0	0%
20 代	10	20%
30 代	10	20%
40 代	15	29%
50 代	11	21%
60 代	5	10%
70 代以上	0	0%
計	51	100%

3.参加動機について（複数回答可）

	人数	%
自分自身や家族のため	8	16%
仕事上必要なので	22	43%
障がい者の支援等に関心があるから	41	80%
社会的関心が高まっているから	6	12%
その他	4	8%
計	81	
実数	51	

4.講演会をどのようにして知りましたか（複数回答可）

	人数	%
長崎大学ホームページ	10	20%
ポスター・チラシ	9	18%
メール	21	41%
テレビ・新聞等	0	0%
担当者からのすすめ	12	24%
上司からのすすめ	1	2%
友人から誘われて	5	10%
小・中・高校からの通知	1	2%
部局からの通知	7	14%
その他	3	6%
計	69	
実数	51	

5.講演の内容はあなたの期待に合っていましたか

	人数	%
期待した内容でとても良かった	26	51%
まあまあ良かった	20	39%
期待に添わなかった	1	2%
その他	4	8%
計	51	100%

〈以下、アンケートの自由記述欄の設問と回答〉　※貴重なご意見等のため、全文記載

●今後、障がい者の理解及び支援等に関する講演でどのような内容を希望しますか

米流の支援の具体例、教材を用いるなど。
大学生だけでなく、小、中、高等学校についても知りたい。
海外での各機関の連携や指導の具体的な策や例を知りたいです。
先進的な取り組みで成功している具体的な例を聴講したいです。
具体的な支援、実践、事例報告など、帰納的に理解する機会。
今日の続きというより、具体例をもっと聞きたい。事前の質問にあった内容はぜひ知りたい。米国での取り組みが日本には上手く適用できないとしても知ってみたいと思った。
障がいを持つ人の可能性を引き出すためのツールの紹介。職場や学校、家庭で使えるもの。地域のツール。

教員の態度と行動。
サービス、アクセスのタイミングについて、もっと知りたいと思いました。何らかの困難が生じ、何らかの障害があるとラベルをはられるプロセスが大切なような気がします。その間にギャップを少しでも減らす？
学生時代の就職支援における就職活動での合理的配慮、企業への働きかけなどどのように行うのか。
国内外問わず様々な事例を知る機会が欲しいです。
この内容に精神障害は含まれていますか。もしないのであれば、一緒に取り上げて欲しいです。（一緒でなくてもいいです。）
大学の取り組みについて 多様な学生を受け入れて共に学びあう環境を作ること、学生にも多様性を受け入れさせる事。この場合極端な思考を持った学生をどう扱うのでしょうか。思考を変えさせるのか。それでも心の自由を尊重するのか。変な質問ですみません。
・やる気を起こせない障がい者の対応はどうしますか。時間をかけますか。放置してしまいますか。 ・これは全ての障がい者のためのものですか。精神障害が含まれていないように思います。 ・福祉の連携の中で支援していてもただ居るだけのスタッフはどうなりますか。（こういう方が中にはいると思います）先生など。 ・本来の支援がなされない方、思い込みで（そのスッタフの人生の生きてきた環境での対応をする仕方）の対応は障がい者にとってとても嫌な思いをする時があります。その思い込みを白くする方法はありますか。 ・ここでの学生が就職し、ダメになった人たちは今どうしておられますか。その後の中高年の人の障がい者の再、再々就職のためのカテゴリーはありますか。
医療方面でも退院後（外来後）自宅で治療を継続していけるようにどのような支援が病院で必要か。
長崎大学における支援について聞いてみたいです。UDL について。
・家族支援（家族ができる支援） ・就労、自立に向けた準備（知識、技術、法律）など。
ＭＢＴＩ（性格検査）
More on research with persons with disability what can be done on a day-to-day basis to have a more inclusive community.（英文のまま）

●意見・感想

学生には内容が難しかった。図など欲しかった。

アメリカでのご経験、ご研究を大変興味深く伺いました。また、パネルディスカッションの皆さんのご発言もうなづきたくなるものがたくさん有りました。長崎大学でもどのような学生も学べる、受け入れられる環境と組織としての態度が１日も早く整備される事を願っています。
通訳の方とても分かりやすい訳でした。しかし出来ればイヤホンなどの同時通訳が有ればなおよかったです。
本日の講演など障がいのある学生達の参加が有ってもよいのでは。
「簡単なＵＤＬ方略の導入」について具体的なＨＰなどがあれば教えて下さい。
素晴らしい講演だったとおもうが、同時通訳は理解しにくかった。
とてもためになりました。UDL は障害者だけでなく、生徒全員にプラスになるものだと知りました。これから少しでも自分にできることがあればと思います。
全ての人に高等教育に保証している点は感銘を受けました。
勉強になりました。ありがとうございました。
米国の現状、先進的取り組みだけでなく、その課題について説明していただきまして、勉強になりました。
大変勉強になりました。有難うございました。
すごくおもしろかった。内容をよく理解しないまま、やって来たが来てよかった。
中途半端に終わらないでください。
メディアの取材などもうけて、広く発信してほしい。長崎から日本にあった方法の提案をしていって欲しい。
Thanks for everything。
教職員の方にも時間の制限があり、生徒一人ひとりの人生を引き受ける事は出来ないので援助の枠を何らかの形で表現しようとすると、また、法律の矛盾のようなものが出てくるのでしょうね。
モニターが二つあったので、日本語表記と英語表記を分けて欲しかった。英語が読めなかったので。
とても役立ちます。教職員の態度が大事であること。納得です。支援を申し出るプロセスが当事者にとって負担だと思っているところがあったので、そのお話も聞いてよかったです。(必要で重要なプロセスではありますが)
スットデン先生がおっしゃる様な大学の授業が望めるなら大学で学びたい障がいのある子が安心してもっとたくさん進学できるのだろうと思った。教育界で「UDL」が流行りますように。40 年支援の進んだアメリカを長崎の共通の問題点も多いのだなとも感心する。
具体的な事例などを聞きたくなりました。

（２） 総　括（１０（１）を踏まえＦＤ全体の総括を記述する）

講演参加後のアンケートについて 51 名（全参加者 92 名の 55%）から回答が得られた。回答した方の講演に対する満足度は高かった（「期待した内容でとてもよかった」及び「まあまあよかった」を合わせて全体の 90%に該当）。また、参加者の半分近く（45 名）が外部からの方であったことから、テーマへの感心の高さ、そして大学として公開講演会を実施する意義が明らかになったと考えられる。

アンケートの自由記述欄（今後聞きたい内容）では、特に事例・具体例の紹介への強い希望が目立つ。就労に関することや偏見・思い込みへの対応についてなど、回答者の多くから実践的な話を聞きたい、という気持ちがよく伝わる。

一方、意見と感想の部分では、刺激や勉強になったというようなコメントが多かったのに加え、UDL（学びのユニバーサルデザイン）に関するコメントもいくつかあった。障害のある方に限らず、全ての人にとって学びやすい環境、暮らしやすい社会への関心の高さの表れでもあると思う。

今回は英語による講演ということで、告知や資料の翻訳、当日の通訳の手配、海外からの登壇者のための複雑な手続きなど、運営面において特に障がい学生支援室のスタッフにとって大変な側面もあったが、限られた人数と時間で一生懸命に頑張ってくださった。予算の制約や地方ならではの困難さもあって、改善の余地はあるものの、参加者の声からして演者の重要なメッセージは概ね伝わったように思われる。今後、参加者の声に応えられるよう、より実践的な内容の講演会を実施できればと考える。

１１．実施代表者の連絡先

部　局：障がい学生支援室
職　名：助教　　氏　名：ピーター・バーニック
e-mail：bernick@nagasaki-u.ac.jp　　内　線：２９４８

１２．申請者の連絡先

部　局：
職　名：　　（同上）　　氏　名：
e-mail：　　内　線：